

ZIMS に登録されたアジアゾウ (*Elephas maximus*) の繁殖傾向について

佐藤 英雄

【背景】国内アジアゾウ血統登録書(2017年版)によれば、記録された第一号は1888年(明治21年)に輸入された雄である。その後、130年余りが経つがその間に繁殖した個体は13頭が記録されるのみである。海外からアジアゾウの導入がないとすると、50年後には国内の飼育頭数は半減する可能性があると考えられる。

一方、1974年に設立された非営利団体のSpecies360(旧国際種情報システム(ISIS))は、2016年の時点で世界中の90カ国、1,000以上の動物園、水族館、動物学の団体が加盟し、メンバーにZIMS(Zoological Information Management System)という動物情報管理システムを提供しており、多くの個体情報が登録されている。

【目的】そこで、このZIMSに登録されたアジアゾウの個体データを使用し、どのような繁殖傾向があるかを見出すことを目的とした。

【方法と結果】ZIMSに登録されたアジアゾウの全個体から、飼育下繁殖個体494頭(193.293.8)とその両親619頭(299.320.0)を抽出した。これらのデータを利用し、以下の項目について調べた。

雌が繁殖した年齢は16歳~20歳がピークであった。高齢で繁殖に成功した個体は、雄が67歳、雌48歳であった。繁殖に成功した両親の年齢差はオスが1歳年上の場合が29例と一番多く、続いて雌雄同年齢が23例であった。子の生死は、調査時点で生存していたのが47%、死亡が39%で、死亡年齢は1歳未満が92例、続いて1~5歳が34例と続いた。子の1歳未満死亡に占める0日死亡割合が65%、育成方法は親によるものが66%、人工が3%であった。国別の出産数は米国が87例、ドイツが59例、飼育施設別の出産数はHANNOVER(ドイツ)が27例、EMMEN(ドイツ)が25例、RAMAT GAN(イスラエル)が20例であった。個体別の出産数は上位から13頭、7頭(2個体)、6頭、雄の種付け数は18頭、15頭、14頭であった。2産以上したメス個体の出産間隔は4年が36例と最も多く、5年が35例、3年が32例、2年が31例であった。

【考察】子は1歳未満の死亡率が高いこと、雌は20歳を過ぎると妊娠する確率が低くなること、そして繁殖数が多い個体に偏りがあること、出産間隔が2年から5年がほぼ同数でそれ以外が極端に少ないことが特徴的であった。6歳~9歳でペアが入園した場合、その組み合わせで繁殖しないと判断し20歳までに他園へ移動するとなると、費用の工面や受け入れ園との調整、箱入れの準備など短期間で多くの事柄を迅速に行なわないと繁殖の機会を失う可能性が高いということになる。今後、日本で飼育されているアジアゾウの繁殖数を向上させ個体数を維持していくには、海外の動物園が群れ飼育へシフトするように日本も飼育方法を見直し個体の施設間移動を増やす必要がある。飼育施設の広さ、輸送に伴う費用、感染症など解決すべき問題はあがるが、各飼育園の管理者や現場の担当者がアジアゾウの置かれている現状を今以上に把握すること、またアジアゾウ計画管理者が策定した繁殖計画を速やかに実行できるようその権限を高めることが必要であると感じた。